

『倭名類聚抄』の本文に関する一考察

—— 複数の出典が挙げられる場合 ——

李 安 九

松 山 大 学
言語文化研究 第29巻第2号（抜刷）
2010年3月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 29 No. 2 March 2010

『倭名類聚抄』の本文に関する一考察

—— 複数の出典が挙げられる場合 ——

李 安 九

1. は じ め に

平安時代（934 年頃）に源順が編纂した『倭名類聚抄』は、見出しの漢字・漢語に対して出典と和訓を注した、意義分類の辞書である。見出し語に対して一々出典を挙げるのは、『倭名類聚抄』の特徴と言える。本文を挙げることで、次の例文（1）のように見出し語に関する説明が記述される場合もあり、例文（2）のように見出し語の異名・別名を示す場合もある。それに対して、例文（3）は見出し語に対する用例としての性格を持つ。また、例文（4）では出典を挙げてはいるものの、見出しとなる漢語を示すのみである。『倭名類聚抄』で出典を挙げることは、見出しとなる漢字・漢語に対して確かな典拠を求め、その形が文献中に実在することを示すことを第一義的な目的とすると考えられる¹⁾

（1） 兔 四聲字苑云、兔 [音度，字佐歧]，似小犬而長耳缺脣者也。

（7-66 オ）²⁾

（2） 繩 兼名苑云、繩 [食陵反]，一名索 [蘇各反，奈波]。 （5-80 ウ）

1) 見出しとなる漢字・漢語に対して確かな典拠を求めようとするのは、典拠ある本文を權威とし、典拠に基づいて記述を行おうとする、平安時代の学問態度としての「本文主義」と関連付けて説明される。「本文主義」については、川口(1959)、池田(1969)、大槻(2002)などを参照。

2) 用例は、十巻本の『箋注倭名類聚抄』による。テキストとしては、京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』（臨川書店、1968）を使用した。「7-66 オ」は巻七 66 丁表をあらわす。

- (3) 水豹 文選西京賦云、掄水豹〔阿左良之〕。(7-57 ウ)
- (4) 手子 遊仙窟云、手子〔師説太奈須恵〕。(2-38 オ)

『倭名類聚抄』では、基本的に一つの見出し語に対して一つの出典を挙げる。しかし、出典となる引用文献が複数にわたる場合も少なくない。十巻本の『箋注倭名類聚抄』では、最大五つまでの出典が挙げられるが、二つ以上の出典が引用される場合は614項目で、総項目数の2割を超える³⁾。本稿では、『倭名類聚抄』において、どのような場合に複数の出典が挙げられるかについて考察を行い、二つ以上の出典が示される場合における提示順序の問題に関しても検討することにする。

2. 複数の出典が挙げられる場合

2.1. 見出し語に関する複数の情報を示す場合

『倭名類聚抄』は、典拠ある本文を載せる類書の形式を取っているが、類書がなるべく多くの情報を集めようとするのに対して、『倭名類聚抄』は類書ほどそれに執着しない。しかし、『倭名類聚抄』においても、二つ以上の出典を挙げて、見出し語に関する説明や異名・別名、用例などの複数の情報を示す場合が多数見られる⁴⁾。

3) 割注で示される場合は除き、「唐韻云」、「陸詞曰」のような引文形式で示される書名や人名を出典として数えた。総614項目のうち、二つの出典が挙げられる場合が519項目で最も多く、三つの出典が挙げられる場合は82項目、四つの出典が挙げられる場合は11項目、五つの出典が挙げられる場合は2項目である。

4) 見出し語に関する複数の情報が一つの出典文献の中で示される場合もある。下の例文では、一つの文献の中で、見出し語の意味説明と異名・別名の情報が共に示されている。

- (1) 杜仲 陶隱居曰、杜仲、一名木綿〔杜音度、波比末由美〕、折之多白絲者也。(10-104 ウ)
- (2) 鮭魚 崔禹食經云、鮭〔折青反、佐介、今案俗用鮭字、非也、鮭音圭、鰓鰻魚一名也〕、其子似苺〔音茂、苺子即是覆盆也、見唐韻〕、赤光、一名年魚、春生年中死、故名之。(8-20 ウ)
- (3) 木瓜 爾雅注云、木瓜、一名楸〔音茂、本草木瓜、毛介〕、其子如小瓜者也。(10-100 オ)

- (5) 芭蕉 唐韻云，芭蕉 [巴焦二音，波勢乎波]，其葉如席者也。
兼名苑云，一名甘蕉。 (10-9 ウ)
- (6) 津 四聲字苑云，津 [將隣反，豆]，渡水處也。
唐令云，諸度關津，及乘船筏上下經津者，皆當有過所。
(3-52 オ)
- (7) 鹿角菜 崔禹食經云，鹿茸 [都乃万太]，狀似水松者也。
文選江賦注云，鹿角菜 [漢語抄云，和名同上]。 (9-32 オ)
- (8) 騎射 漢書云，甘延壽，以良家子善騎射。
楊氏漢語抄云，馬射 [宇末由美，今案馬射即騎射也]。 (2-87 オ)
- (9) 大辛螺 七卷食經云，大辛螺 [阿歧]。
漢語抄云，蓼螺一名赤口螺 [和名同上，弁色立成説亦同之]。
(8-39 ウ)

例文 (5) は「芭蕉」に対する説明と異名・別名の情報を提示し，例文 (6) は「津」に関する説明と用例を示している。例文 (7) では，意味説明の後に見出し語と一致する形を示し，例文 (8) は，見出し語が使われる用例の後に見出し語の異名を提示する。例文 (9) は，見出しの形を単独で提示した後，同じ訓で読まれる異名・別名を示している。例文 (5)－(9) のような場合は，様々な文献より見出し語に関わる記述や用例，異名・別名などの情報を集めようとすることによって，複数の出典を挙げるようになったのだろう。

2.2. 見出し語と関連性を持つ事柄の記述を加える場合

『倭名類聚抄』では，複数の出典を引用して，見出し語と関連性を持つ事柄について記述を加える場合がある⁵⁾。

- (10) 機 國語注云，織設經緯以機 [居衣反，楊氏漢語抄云，高機，多加波太，今案機巧之處，和加豆利]，成繪布也。

[經緯附] 説文云、緯 [音尉、沼岐、謂緯則經可知]、横織絲也。(6-53 ウ)

(11) 軾 説文云、軾 [音式、車乃止之岐美]、車前也。

[軾附] 四聲字苑云、軾 [之忍反]、車後横木也。(3-72 ウ)

(12) 餅 釋名云、餅 [音屏、毛知比]、令糯麵合并也、胡餅、以胡麻着之 [今案麵麥粉也、此間餅粉、阿禮、是也]。

[殽字附] 四聲字苑云、殽 [孚乳反、與撫同、今案訓賀布]、食上生白者也。(4-43 オ)

(13) 牛 四聲字苑云、牛 [語丘反、字之]、土畜也。

[犢附] 爾雅注云、犢 [音讀、古字之]、牛子也。(7-77 ウ)

例文 (10) は、見出しの「機」に関する記述の中で使われた「緯」の字に対して、別の出典を挙げて説明を付け加える場合である。二番目に提示されている本文の内容は、前の記述で現れた「緯」の字に対する注釈的な情報と言える。例文 (11) は、見出しの「軾」と意味的に対となる「軾」の字に関する記述を付け加えている。例文 (12) では、「餅」の項目の中で「かびる」の訓を持つ「殽」の字について説明を施している。例文 (13) では、見出しの「牛」の下位部類に属する「犢」の字に対して記述が行われている。このような場合は、見出し語との関連性は認められるものの、直接見出し語に関わる記述とは言い

5) 見出し語と関連性を持つ事柄の記述が示される場合、必ずしも複数の文献が出典として挙げられるとは限らない。下の例文 (1) - (3) は、一つの出典の中で関連事項の記述を付け加える場合である。因みに、例文 (1) の原文では、部首字の「齒」の部分が「口斷骨也、象口齒之形、止聲、凡齒之屬皆從齒、昌里切」となっており、「齧」に対しては、「毀齒也、男八月生齒、八歲而齧、女七月生齒、七歲而齧、從齒從匕、初莖切」と注をつけている。「齧」の前には、「斷」の字が介在し、「齒」と「齧」が直接隣接しているわけではない。

(1) 齒 説文云、齒 [音始、波]、口中斷骨者也、齧 [初覲反、去聲、訓波加久]、毀齒也。
[齧附] (2-15 ウ)

(2) 斧 兼名苑注云、斧 [音府、乎能、一云與岐]、神農造也、秘 [音秘、一音必、乎乃々
[秘附] 江、一云布流]、斧柄名也。(5-84 ウ)

(3) 棺 四聲字苑云、棺 [音官、一音貫、比度岐]、所以盛屍也、屍 [音與尸同、訓或通]、
死人形體曰屍也。(6-77 ウ)

難く、やはり別の事柄と看做すべきである。一つの項目の中で見出し語に対する記述のみならず、何らかの関連性を持つ事柄に対してまでもまとめて記述することは、所謂百科事典的性格として把握できる。

2.3. 注釈文を合わせて引用する場合

次の例文 (14)－(15) は、出典として挙げられる文献に対して、その注釈書の作者名を挙げて注釈文を付け加える場合である。

- (14) 鞞 文選射雉賦云，青鞞〔音秋，師説乎布佐〕。

李善曰，鞞，夾尾之間也。 (7-46 ウ)

- (15) 洲 爾雅云，水中可居者曰洲〔音州，和名渟〕。

李巡曰，四方皆有水也。 (1-57 ウ)

『文選』に対しては、「李善」のほか、「劉良」や「薩琮」の注が付けられ、『爾雅』に対しては、「李巡」、「孫炎」、「郭璞」、「舍人」の注が示される。他の漢籍では、『尚書』に対して「孔安国」の注が付けられ、『楊雄方言』や『山海經』に対して「郭璞」の注が付けられている。『倭名類聚抄』において、注釈書の作者名のみが単独で挙げられることは殆どなく、「文選注」や「爾雅注」、「尚書注」、「方言注」、「山海經注」のように注釈書の作者名を挙げない場合が多い⁶⁾。

2.4. 見出し語を構成する各々の字に対して出典を挙げる場合

『倭名類聚抄』には、二つの漢字が見出しとなり、各々の字に対して出典を挙げる場合がある。

- (16) 脅肋 四聲字苑云，脅〔虚業反，加太波良保欄〕，身傍脅肋間也。

文字集略云，肋〔音勒，太須介乃保欄〕，幹骨也。 (2-27 ウ)

(17) 臣僕 文字集略云、臣[音辰、日本紀私記云、夜都加禮]、在下之稱也。

唐韻云、僕[蒲木反、和名上同]、侍從人也。(1-94 ウ)

例文(16)－(17)のように、見出しを構成する二つの字に対して各々出典を挙げる場合は、前の字に関する記述が後の字に関する記述より先行する。例文(16)では、「脅」と「肋」の字に対して各々の和訓が挙げられるが、例文(17)は、「臣」と「僕」の二つの字が同じ訓で読まれる。(16)－(17)のような例としては、「陂堤」(1-49 ウ)、「嶋嶼」(1-63 ウ)、「朋友」(1-96 ウ)、「巫覡」(1-100 オ)、「咽喉」(2-17 ウ)、「鬢髮」(2-18 ウ)、「樓閣」(3-4 ウ)、「車駕」(3-68 ウ)、「權衡」(6-23 オ)など、二つの字が意味的に密接な関連性を持つ場

6)『倭名類聚抄』には、その他にも「周易注」,「周禮注」,「毛詩注」,「国語注」,「禮記注」など、多くの漢籍の注釈が引用されている。下の例文(1)では、「漢書注」の後に「應劭」と「李斐」の注釈が続くが、「漢書注」を出典として引かれている「高祖爲人隆準」の部分は、注釈文ではなく、『漢書』の本文である。例文(2)は、「張晏」と「應劭」の漢書注を引いているが、『広韻』の「𪔐」の条を見ると、「説文曰、木上曰果、地上曰𪔐、應劭曰、木實曰菓、草實曰𪔐、張晏曰、有核曰菓、無核曰𪔐」となっている。この例は、山口(1968 a)も言及したように、『唐韻』より引用したものと考えられる。

(1) 鼻 陸詞切韻云、鼻[音美、波奈]、面中岳也。

[嚏附] 漢書注云、高祖爲人隆準[音准]。

應劭曰、隆、高也。

李斐曰、準、鼻也。

玉篇云、嚏[丁計反、波奈比流]、噴鼻也。

(2-12 ウ)

(2) 果𪔐 唐韻云、説文、木上曰果[古火反、字亦作菓]、日本紀私記云、古能美、俗云、久多毛乃]、地上曰𪔐[力果反、久佐久太毛能]。

張晏曰、有核曰菓、無核曰𪔐[核見果𪔐具]。

應劭曰、木實曰菓、草實曰𪔐。

(9-56 オ)

7) 意味的に密接な関連性を持つ二つの漢字が見出しとなる場合、次の例文(1)－(2)のように一つの出典を挙げて各々の字に対する記述を施す場合もある。下の(1)の原文では、「表、上衣也、從衣從毛、古者衣裳、以毛爲表、陂矯切」の後に「裏、衣内也、從衣、里聲、良止切」と続くが、「衣外也」という部分は見当たらない。例文(2)の場合、『大広益会玉篇』を参照すると、「血」に対する「肉中赤汁也」の部分は見当たらず、「脉」に対しては、「肉中血理也」の「血理也」のみ確認できる。

(1) 表裏 説文云、表[碑矯反、字閑]、衣外也、裏[音里、字良]、衣内也。(4-18 ウ)

(2) 血脉 野王案、血[音決、知]、肉中赤汁也、脉[音麥、知乃美知]、肉中血理也。

(2-33 オ)

合が殆どである?

3. 複数の出典が示される場合における提示順序の問題

ここでは、複数の出典が挙げられる場合、どのような順序で示されるかという問題について考察する。まず、2.2の例文(10)－(13)のように、見出し語と関連性を持つ事柄の記述が示される場合は、見出し語に直接関わる記述が関連事項の記述より優先するのが自然である。2.3の例文(14)－(15)のように注釈が附く場合は、もちろん注釈文が後に示される。また、2.4の例文(16)－(17)のように見出しを構成する各々の字に対して出典を挙げる場合は、前の字に関する記述が後の字に関する記述より先行する。それに対して、2.1の例文(5)－(9)のように見出し語に関する複数の情報が示される場合は、どのような基準によって順序付けられるのか、明確ではない。ここでは、その可能性として、見出し語と一致する形が本文の中に現れるかどうかという問題、そして、出典文献の性格との関連性について考えてみることにする。

3.1. 見出し語と一致する形が本文の中に現れるか

『倭名類聚抄』で出典を挙げることが、見出しの漢字・漢語が典拠となる文献の中に実在することを示すためであるなら、本文の中に見出し語と一致する形が現れるかどうかという問題が出典配列の一つの基準として働く可能性が考えられる。

下の〈表1〉は、見出し語と一致する形が現れる場合を、提示される文献の数や順番別に分けて纏めたものである⁸⁾。完全に一致する場合の数値の下に、部分的に一致する場合や見出し語を構成する各々の字が離れて現れる場合、異体字が使われる場合などを含む数値を〔 〕の中に示し、総数に対する比率を各々提示する。

(18) 〈表1〉

提示 文献数	総数	見出し語と一致する形が現れる場合			
		1 番目の文献	2 番目の文献	3 番目の文献	4 番目の文献
1	1994	1766 (88.5%) [1980] (99.2%)	—	—	—
2	519	412 (79.3%) [495] (95.3%)	246 (47.3%) [319] (61.4%)	—	—
3	82	60 (73.1%) [80] (97.5%)	32 (39.0%) [50] (60.9%)	24 (29.2%) [39] (47.5%)	—
4	11	10 (90.9%) [11] (100%)	4 (36.3%) [5] (45.4%)	2 (18.1%) [3] (27.2%)	2 (18.1%) [3] (27.2%)

まず、一つの出典が提示される場合は、見出し語と完全に一致する形が本文中に使われる場合が殆どで、部分的に一致する場合や見出し語を構成する各々の字が離れて現れる場合、あるいは異体字が使われる場合⁹⁾などを含めると、全く一致しない場合は極めて稀である。そして、出典が複数にわたる場合は、最初に引用される文献の中に見出し語と一致する形が現れることが多く、より後になればなるほど、見出し語と一致する形が現れる比率は低くなる。

一方、十巻本と二十巻本の間で、見出し語の交代と共に、出典の提示順序も

8) 五つの文献が示される場合は、2例に過ぎず、〈表1〉には示していない。2例のうち、1例(「鼻」)は注6で示したが、もう一つの例を下に挙げておく。下に示す「琴」の条に関しては、諸本間の異同が見られるが、ここではテキストとして使用した十巻本の例のみを提示する。

琴 唐韻云、琴 [巨金反]、樂器、神農作之、本五絃、周文王加二絃 [音與弦同、古度乃乎、樂有絃者皆用之]。

帝王世記云、炎帝作五絃琴。

世本云、神農作之。

琴操云、伏羲作之、以具宮商角徵羽、至周文王增二絃、一説云、文王武王各加一絃。

文選琴賦云、徽以鐘山之玉 [今案俗説、琴體有龍池、鳳池、龍舌、龍尾、蜂腰、鳳足、絃門、絃納、古人肩等名]。 (6-2ウ)

9) 異体字が使われる場合は、次の例 (1) - (2) のように割注の中に「字亦作」、「字或作」などの注が付く。

(1) 笋 爾雅注云、筍 [音隼、字亦作笋、太加无奈]、竹初生也。 (10-86ウ)

(2) 輦 四聲字苑云、輦 [音餘、字或作輿、古之]、車無輪也。 (3-68ウ)

逆転する場合がある。次の(19)と(20)は十巻本、(19′)と(20′)は二十巻本の例である。

- (19) 大甕 辨色立成云、大甕 [美賀]。
 本朝式云、甕 [和名同上、音長、一音仗、見唐韻]。(4-88 オ)
- (19′) 甕 本朝式云、甕 [美加、今案、音長、一音仗、見唐韻]。
 辨色立成云、大甕 [和名同上]。(16-7 オ)
- (20) 艾 本草云、艾、一名醫草 [與毛歧]。
 兼名苑云、蓬 [音逢]、一名葦 [音畢]、艾也。(10-55 ウ)
- (20′) 蓬 兼名苑云、蓬一名葦 [艾也、蓬葦二音逢畢、和名與毛木、艾音五蓋反]。
 本草云、艾、一名豎草。(20-13 オ)

上のような例の存在は、見出し語と一致する形が本文の中に現れるかどうかという問題を『倭名類聚抄』の出典提示における一つの基準として考える根拠となり得るだろう。

それに対して、次の例文(21)と(22)は、十巻本と二十巻本の間で見出し語の交代はあるものの、文献の提示順序は変わらない場合である¹⁰⁾ (21)と(22)は十巻本、(21′)と(22′)は二十巻本の例である。

- (21) 渡子 文選江賦云、涉人於是櫜榜 [櫜、正也、和名佐乎]。
 日本紀私記云、渡子 [和太利毛利、今案俗云和太之毛利]。
 (1-103 オ)
- (21′) 涉人 文選江賦云、涉人於是櫜榜 [櫜、正也、和名佐乎]。

10) 不破(1991)では、十巻本と二十巻本の間で見出し語が交代する例として、(19)の「大甕-甕」のほかに「浅甕(十巻本)-脛(二十巻本)」,また(21)の「渡子-涉人」のほかに「水手(十巻本)-舟子(二十巻本)」や「挾抄(十巻本)-楫師(二十巻本)」の例を指摘したが、(20)と(22)の例に関しては触れていない。

日本紀云、渡子 [和名和太之毛利]、一云 [和太利毛利]。

(2-11 ウ)

- (22) 嚇 唐韻云、鳴 [音名、奈久]、鳥啼也、囀 [音轉、佐閉都流]、鳥吟也。

文選蕪城賦云、寒鴟嚇鵂 [嚇音呼格反、師說賀々奈久]。

(7-49 ウ)

- (22′) 鳴 唐韻云、鳴 [音名、訓與啼同]、鳥啼也、囀 [音轉、訓佐閉都流]、鳥吟也。

文選蕪城賦云、寒鴟嚇鵂 [嚇音呼格反、師說寒鴟讀古伊太流止比、嚇讀加々奈久]。

(18-12 ウ)

このような例においては、また他の基準が作用しているように思われる。『倭名類聚抄』で出典を提示するのは、見出し語の形が実在することを示すだけでなく、見出し語が典拠を持つことを表すことで権威付けようとする本文主義に関わることもある。その点を考慮すると、どのような文献を出典として挙げるかという問題は、出典を選ぶ段階のみならず、複数の文献を順序づけて並べる過程においても、重要な基準として働いていたのかもしれない。次の3.2では、その点について考察する。

3.2. 本文の内容や出典文献の性格

『倭名類聚抄』の本文は、見出し語に対して、意味説明や別名・異名、用例などの情報を提示するが、そのような本文の内容は、出典として挙げられている文献の性格と密接に関連する。『倭名類聚抄』には、三百数十種の文献が引用されているが、総引用回数が20を超えるものは30程度に過ぎず¹¹⁾、特に韻書類や字書類、物名・医書類などの漢籍、また、『倭名類聚抄』の材料となった漢語抄類の引用が多い。次に、総引用回数が20を超える文献を中心に、文献の性格による出典提示の傾向について検討する¹²⁾。

3.2.1. 漢語抄類

『倭名類聚抄』は、漢語抄類の集大成と言えるほど漢語抄類と密接な関係を持つ。『楊氏漢語抄』¹³⁾や『辨色立成』、『日本紀私記』のような漢語抄類は、『倭名類聚抄』の和訓の直接的な材料とされており、「本文未詳」の場合に直挙される文献として説かれている¹⁴⁾。次の表は、『倭名類聚抄』における漢語抄類の引用様相を示している¹⁵⁾。

- 11) 総引用回数が20を超える文献を引用回数が多い順番に提示すると、次の通りである。
() 中の数値は、『倭名類聚抄』における引用回数を示す。引用回数に関しては、藏中進・林忠鵬・川口憲治(1999)も参考にしつつ、割注に示される場合は除いて数えた。

[1] 唐韻 (398), [2] 本草 (246), [3] 説文 (176), [4] 四聲字苑 (159), [5] 玉篇 (野王案) (141), [6] 兼名苑 (136), [7] 楊氏漢語抄 (120), [8] 釋名 (104), [9] 爾雅 (94), [10] 辨色立成 (86), [11] 爾雅注 (85), [12] 崔禹食經 (68), [13] 蘇敬本草注 (58), [14] 日本紀私記 (56), [15] 陸詞切韻 (55), [16] 陶隱居本草注 (54), [17] 蔣飭切韻 (47), [18] 唐令 (44), [19] 兼名苑注 (45), [20] 文字集略 (44), [21] 孫愐切韻 (42), [22] 文選 (38), [23] 爾雅集注 (32), [24] 考聲切韻 (30), [25] 唐式 (29), [26] 本朝式 (28), [27] 内典 (27), [28] 病源論 (27), [29] 文選注 (26), [30] 広雅 (23), [31] 毛詩注 (23), [32] 周禮注 (20)。

- 12) 辞書に多数の出典が挙げられる場合は、その出典の間に序列が存在し、配列の順序が決められることがある。同じ平安時代の代表的な古辞書である『類聚名義抄 (図書寮本)』の場合、「法華音訓—篆隸万象名義—一切經音義—妙法蓮華經釈文—大般若經音訓—玉篇—東宮切韻—和名抄」のような序列で示されるという宮澤 (1992)、池田 (1994) などの研究結果が出されている。出典間の序列を明らかにするためには、二つの文献が同一の項目の中で共に挙げられる際、それらの文献がどういう順序で並べられているのかを調べなければならない。『倭名類聚抄』の場合、引用されている文献の数は多いが、二つの文献が共に挙げられる場合の数は、序列を比較できるほど十分ではない。なお、二つの文献の順序が必ずしも決まっているわけではなく、前後の順序が逆転することもある。また、『倭名類聚抄』に引用されている文献の幾つかは、直接的な材料となった文献より孫引きしている可能性が高いとされており、『倭名類聚抄』において出典の序列を比較するのは難しいかもしれない。ここでは、ある文献が他の文献と共に挙げられる際、一番目の出典として挙げられる回数と二番目以降に示される回数を比較し、出典提示の傾向を把握することにした。

- 13) 「漢語抄」と「楊氏漢語抄」は、同じものとして扱うか、別のものとして認めるかという問題があるが、〈表6〉の「楊氏漢語抄」の数値には、「漢語抄」の数は入っていない。因みに、「漢語抄」は、総引用回数が13回で、他の文献とともに挙げられる場合は3例あるが、すべて後に示されている。

(23) 〈表2〉

	総 (A=③+④)	単 (③)	複 (C=⑤+⑥)	初 (⑤)	後 (⑥)
楊氏漢語抄	120	78	42	8[7]	34[30]
辨色立成	86	66	20	5[3]	15[11]
日本紀私記	56	34	22	2[2]	20[15]

上の〈表2〉を見ると、漢語抄類は他の文献より後に挙げられる傾向が顕著に現れている。最初に示される場合 (㊦) のうち4例は、例文 (24) のように漢語抄類同士で引用される場合である。また、例文 (25) のように後に『本朝式』が置かれる場合も6例見られるが、『本朝式』は日本で作られた国書であって、正格である中国の漢籍に対する「仮」のものと言える¹⁴⁾。漢語抄類の後に『本朝式』が置かれるのは、このような性格に因るものと考えられる。一方、漢語抄類は、見出し語に対する説明を行うことは稀で、おおよその場合は見出し語のみを単独で示す。

14) 『倭名類聚抄』の序文において、漢語抄類が言及される部分を下に挙げておく。(1) は内親王が源順に『倭名類聚抄』の編纂を命じた経緯を述べる部分で、(2) は源順の撰述過程に関わる部分である。

(1) 「其教曰、我聞思捨芥者、好探義實、期折桂者、競採文華、至于和名、棄而不屑、是故雖一百帙文館詞林、三十卷白氏事類、而徒備風月之興、難決世俗之疑、適可決其疑者、辨色立成、楊氏漢語抄、大醫博士深根輔仁奉勅撰集和名本草、山州員外刺史田公望日本紀私記等也、然猶養老所傳楊説纔十部、延喜所撰藥種只一端、田氏私記一部三卷、古語多載、和名希存、辨色立成十有八章、與楊家説名異實同、編錄之間、頗有長短…(中略)…汝集彼數家之善説、令我臨文無所疑焉」

(2) 「或漢語抄之文、或流俗人之説、先舉本文正説各附出於其注、若本文未詳、則直舉辨色立成・楊氏漢語抄・日本紀私記、或舉類聚國史・万葉集・三代式等所用之假字」

15) 割注で使われる場合は除き、出典として引用されている総数 (A) を、単独で示される場合 (B) と他の文献と一緒に使われる場合 (C) に分けて提示し、他の文献と共に使われる場合 (C) に対しては、最初の本文として引用される場合 (㊦) と二番目以降に示される場合 (㊧) の数を各々示す。また、初めに置かれる場合 (㊦) と他の文献の後に示される場合 (㊧) に対しては、見出し語と関連性を持つ事柄に関する記述が示される場合 (2.2) や注釈が附く場合 (2.3)、二つの字に対して各々出典を挙げる場合 (2.4) を除いた数を [] の中に提示する。以下、〈表3〉～〈表6〉に関しても同じである。

16) 『倭名類聚抄』の序文で日本製の「仮字」として挙げられている「類聚国史」や「万葉集」、「開元式」なども、他の文献と共に挙げられる場合はすべて後に示される。「功程式」は他の文献と共に使われる例が見当たらない。

- (24) 獺子鳥 楊子漢語抄云、獺子鳥 [俗云、阿止利]。
 辨色立成云、鵲鴛鳥 [和名同上、一云胡雀、今案本文未詳、但
 或説云、此鳥群飛如列卒之滿山林、故名獺子鳥也]。(7-15 ウ)
- (25) 浅甕 日本紀私記云、浅甕 [佐良介]。
 本朝式云、醴 [和名上同、今案所出未詳]。(4-88 ウ)

3.2.2. 韻書類

『倭名類聚抄』には、『唐韻』をはじめ、『四聲字苑』、『陸詞切韻』¹⁷⁾、『蔣鮐切韻』、『考聲切韻』などの韻書類の引用が非常に目立つ。とりわけ、『唐韻』は『倭名類聚抄』に引用されている文献の中で最も引用回数が多い。

(26) <表3>

	総(A=B+C)	単(B)	複(C=㊦+㊧)	初(㊦)	後(㊧)
唐韻	398	241	157	96[88]	61[32]
四聲字苑	159	89	70	36[22]	34[16]
陸詞切韻	55	32	23	21[12]	2[2]
蔣鮐切韻	47	30	17	11[6]	6[2]
孫愐切韻	42	27	15	4[3]	11[10]
考聲切韻	30	22	8	5[5]	3[2]

上の表を見ると、韻書類は『孫愐切韻』を除けば、最初に示される場合が多く、他の文献より優先的に提示される傾向があると言える¹⁸⁾。他の文献の後に示される場合でも、見出し語に関する関連事項の記述を付け加える場合や見出し語を構成する各々の字に対して出典を提示する場合が多く、他の文献の後に

17) 『倭名類聚抄』における『陸詞切韻』について、上田(1984)では、『陸詞切韻』の訓義に陸法言のものとは思われない部分があることを根拠として、『東宮切韻』からの引用と指摘するが、辻(1979)と中村(1988)は、『王仁煦切韻』に親近性を持つ一書からの直接引用と見ている。中村(1988)は、『東宮切韻』からの引用と認めない根拠として、『陸法言』ではなく、『陸詞』と記していること、また、『東宮切韻』から引用されている他の切韻に比べて引用回数が多いことを指摘している。

示される比率はより低くなる。韻書類が挙げられている本文の内容は、下の例文(27)－(29)のように見出しの漢字に対する基本的な説明を提供する場合が殆どである。韻書類は、漢字・漢語に対する説明を記述するのみならず、音注を付けることも多く、『倭名類聚抄』を編纂する上で、非常に有効で、参考に値する材料だったと考えられる。

- (27) 畔 陸詞曰、畔〔音半、和名久路、一云阿〕、田界也。
唐韻云、塍〔食陵反、字亦作埭、和名上同〕、稻田畦也、畦〔音携〕、菜畔也。 (1-76 ウ)
- (28) 煇煇 唐韻云、熾〔昌志反、漢語抄云、於歧比〕、猛火也、又盛也。
四聲字苑云、煇煇〔唐隈二音、和名上同〕、熱灰兼火也。 (4-100 オ)
- (29) 狐 考聲切韻云、狐〔音胡、歧豆欄〕、獸名、射干也、關中呼爲野干、語訛也。
孫愐曰、狐能爲妖怪、至百歲化爲女者也。 (7-63 オ)

3.2.3. 字書類

『倭名類聚抄』には、字書類の引用も多い。次の〈表4〉は、字書類の場合を提示している。

18) 『倭名類聚抄』の『孫愐切韻』の部分は、下のような例で見てわかるように、『東宮切韻』から孫引きしたものと考えられる。上田(1956)によると、『東宮切韻』は、「陸法言、郭知玄、釈氏、長孫訥言、韓知十、武玄之、薩珣、麻果、王仁煦、祝尚丘、孫愐、孫仙、沙門清徹」の切韻を集めているが、これらは、ほぼ時代順の配列である。韻書類のうち、『孫愐切韻』のみが他の文献の後ろに置かれる場合が多いことは、『東宮切韻』の中で『孫愐切韻』が年代的に新しいものとして後に置かれることと何らかの関連があるのかもしれない。

袈裟 東宮切韻云、釋氏曰袈裟〔加沙二音、俗云介佐〕、天竺語也、此云無垢衣、又云功德衣。
孫愐曰、傳法衣、即沙門之服也。 (5-12 オ)

(30) 〈表4〉

	総 (A=B+C)	単 (B)	複 (C=ⓧ+Ⓨ)	初 (ⓧ)	後 (Ⓨ)
説文	176	105	71	44[26]	27[20]
野王案・玉篇	141	68	73	27[13]	46[29]
[野王案/玉篇]	99/42	44/24	55/18	18[8]/9[5]	37[27]/9[2]
釋名	104	66	38	13[4]	25[21]
爾雅	94	55	39	30[16]	9[8]
文字集略	44	25	19	9[5]	10[4]

『説文』と『爾雅』は、最初に示される場合が多いが、これらは古くから広く使われてきた字書として重要視されたと考えられる¹⁹⁾ とりわけ『説文』には、意味説明のみならず、音注が施される場合もあり、複数の情報が得られる便利さは、韻書と変わらない。『玉篇（野王案）』²⁰⁾、『釋名』、『文字集略』は、次の例文(31)－(33)のように、韻書類や字書類などの他の文献の後に示され、見出し語に対する補足的な説明を付け加える場合が少なくない。

(31) 蜜 説文云、蜜 [音密，此間云美知]，甘飴也。

野王案，蜂採百花，醞釀所成也。

(4-53 ウ)

19) 『倭名類聚抄』における「説文」に関しては、山口(1968 a, b)の研究がある。山口(1968 a)は、『倭名類聚抄』の中で「唐韻云，説文…」の形を取っている「炙」(4-60)や「椽」(7-48 オ)、「果臝」(9-56 オ)の例を唐韻から引用されたものとして挙げている。一方、次の例 (1)－(3) は、「唐韻」の後に「説文云」，「爾雅云」と示されており、『広韻』で各々の部分を確認できる場合である。このような例は、恐らく唐韻からそのまま引用した可能性が高いと考えられる。因みに、(3) の「烏」の場合は、『広韻』を見ると、「唐韻云」の後に「説文曰」が入っている。

(1) 觶 唐韻云，觶 [許規反，久之利]，角錐，童子佩觶。

説文云，角銳端，可以解結者也。

(5-89 オ)

(2) 盆 唐韻云，盆 [蒲奔反，字亦作盆，辨色立成云比良加]，瓦器也。

爾雅云，盆謂之缶 [音不，訓保度岐]。

兼名苑云，盆一名孟 [音于]。

(4-90 オ)

(3) 烏 唐韻云，烏 [哀都反，加良須]，孝鳥也。

爾雅云，純黑而反哺者，謂之烏 [哺音薄故反，食在口也]。

兼名苑云，一名鴝 [音硯，字亦作鴝，見唐韻]。

(7-12 ウ)

20) 『倭名類聚抄』における「野王案」・「玉篇」に関しては、辻 (1980) などを参照。

- (32) 綺 蒋飴切韻云，綺〔虚彼反，歧，一云於利毛能，又一訓加无波太〕，似錦而薄者也。
釋名云，綺，棊也，謂方文如棊也。 (3-90 オ)
- (33) 鱗 唐韻云，鱗〔音隣，伊路久都，俗云伊侶古〕，魚甲也。
文字集略云，龍魚之屬之衣曰鱗也。 (8-31 オ)

3.2.4. 医書・物名類

次の〈表5〉は、『倭名類聚抄』において医書・物名類がどのように引用されているかを提示したものである。

(34) 〈表5〉

	総(Ⓐ=Ⓑ+Ⓒ)	単(Ⓑ)	複(Ⓒ=ⓧ+Ⓨ)	初(ⓧ)	後(Ⓨ)
本草	246	166	80	54[27]	26[20]
兼名苑	136	58	78	25[22]	53[49]
崔禹食經	68	45	23	10[10]	13[13]
病源論	27	25	2	0[0]	2[2]

『本草²¹⁾』、『崔禹食經』、『病源論』などの医書類は、下の例文(35)－(36)のように、見出し語に対する説明や別名を提示することが多く、医書類同士で使われることも頻繁である。『兼名苑』は、例文(37)のように「一名」を冠して様々な異名・別名を示すが、単独で使われるよりは、他の文献と共に挙げられることが多い。『兼名苑』の場合、他の文献の後に示される傾向が見られるが、それは異名・別名を示すという文献上の性格と関わるのかもしれない²²⁾。

- (35) 鮎 本草云，鮎魚〔上音夷〕。
蘇敬注云，一名鮎魚〔上奴兼反，阿由，漢語抄云銀口魚，又云細鱗魚〕。
崔禹食經云，貌似鱒而小，有白皮，無鱗，春生夏長秋衰冬死，故名年魚也。 (8-27 ウ)

- (36) 虻虫 唐韻云，虻〔音與廻同〕，人腹中長虫也。

病源論云，虻虫〔今案一名寸白，俗云加以，又云阿久太〕，飲白酒食生栗等所成也。
(2-63 ウ)

- (37) 沈香 本草云，沈香〔沈俗音女林反〕，節堅而沈水者也。

兼名苑云，一名堅黑。
(6-36 ウ)

21) 「本草」は、「陶隱居本草注」と「蘇敬本草注」がその注釈として付け加えられる場合が各々9例，12例見られる。「陶隱居本草注」と「蘇敬本草注」は，単独の出典として使われる場合も各々35例，33例確認される。また，他の文献より前に示される場合もあって，2.3の例(14)－(15)のような注釈の場合とは区分できる。「陶隱居注」と「蘇敬注」が共に使われる場合は，「陶隱居注」が「蘇敬注」より先に挙げられる例が3例見られる。それは，『倭名類聚抄』の直接的な材料とされる『本草和名』において，年代的により古い「陶隱居注」が「蘇敬注」より先に提示されることを反映していると判断される。下の例文(1)には『倭名類聚抄』，(1′)には『本草和名』における「積雪草」の例を挙げておく。ほかの2例(「大麥(9-5ウ)」，「仙靈毘草(10-41ウ)」)の場合も，『本草和名』で該当部分を確認できる。一方，『倭名類聚抄』で「蘇敬注」が「陶隱居注」より先に示されるのは，例文(2)の「醍醐(4-52オ)」1例のみであるが，(2′)の『本草和名』では，「蘇敬注」や「陶隱居注」を出典として挙げていない。

- (1) 積雪草 陶隱居曰，積雪草〔豆保久佐〕，寒冷故以名之。

蘇敬曰，其葉如錢，故亦名連錢草。
(10-61 オ)

- (1′) 積雪草 陶景注云，此草當奇寒冷耳。一名地錢草〔葉如錢故以名之〕一名連錢草〔已上二名出蘇敬注〕一名停雪〔出積藥〕一名水氷〔出雜要決〕和名都保久佐
(上34ウ)

- (2) 醍醐 蘇敬曰，醍醐〔啼胡二音，此間音内五，醐字，或又作𩚑𩚑，見唐韻〕，是酥之精液也。

陶隱居曰，一名解酥，言蘇一斛之中得四升也。
(4-52 オ)

- (2′) 醍醐 〔仁輯音啼胡二音蘇之精液也〕一名解醐〔百練者名也〕一名醍醐妙藥〔已上二名出崔禹〕一名鋒胡〔出雜要決〕唐
(下6ウ)

22) 『倭名類聚抄』で『兼名苑』を出典とする136例中，「一名」を冠して別名・異名を示している例は125例に達する。その中には，下に示す例文(1)－(3)のように意味説明が記述される場合も40例ほど見られる。箋注では，「一名」の形式で別名・異名のみを羅列する「兼名苑」と，意味説明的な本文を持つ「兼名苑注」を区分し，「兼名苑」を出典としながら「一名」の形式のほかは何らかの意味説明が記述される場合に関しては，「蓋(是)兼名苑注文」，「當是兼名苑注文」，「疑是兼名苑注文」などの注を付けている。

- (1) 短刀 兼名苑云，刺刀〔能太知〕，短刀也。〔〇所引蓋兼名苑注文(後略)〕。(5-40ウ)

- (2) 長庚 兼名苑云，大白星一名長庚〔此間云，由布都々〕，暮見於西方爲長庚耳。〔〇(前略)暮見以下，當是兼名苑注文(後略)〕
(1-16オ)

- (3) 山榴 兼名苑云，山榴〔阿伊豆々之〕，即山石榴也，花與羊躑躅相似矣。〔〇兼名苑下恐脱字注〕。
(10-101オ)

3.2.5. 令・式のような実用書

次の〈表6〉は、令・式のような実用書の引用様相を提示している。

(38) 〈表6〉

	総($A=B+C$)	単(B)	複($C=x+y$)	初(x)	後(y)
唐令	44	30	14	5[4]	9[7]
唐式	29	19	10	2[2]	8[6]
本朝式	28	17	11	1[1]	10[9]

『唐令』と『唐式』は、韻書・字書類などの漢籍の後に示されることが多い。最初に挙げられる場合でも、その後には下の例文(39)－(40)のように『本朝令』や『本朝式』などが示されることが少なくない。『本朝式』は殆ど後に示されるが、それは3.2.1でも述べたように『本朝式』が日本製の「仮字」であることで説明できる。²³⁾『唐令』と『唐式』は、典拠ある漢籍と言えるが、これらは学問の世界における正統の文献として十分認められなかったのかもしれない。なお令・式のような実用書は、漢字・漢語に対する意味説明よりは、用例として使われることが多い。

(39) 腰鼓 唐令云、高麗伎一部、横笛腰鼓各一〔腰鼓俗云三鼓〕。

本朝令云、腰鼓師一人〔腰鼓讀久禮豆々美、今吳樂所用是也〕。

(6-15 オ)

(40) 燈籠 内典云、燈爐〔見涅槃經〕。

唐式云、燈籠〔見開元式〕。

本朝式云、燈樓〔見主殿寮式、今案三名皆通稱也〕。(4-105 オ)

23) 関連するものとして、「本朝格」や「本朝令」の場合が考えられるが、本朝格は3例とも単独の本文として使われており、本朝令の2例と本朝令義解の1例は、単独で使われることはなく、唐令などの後に挙げられている。

4. 終 わ り に

『倭名類聚抄』の本文は、見出し語に対して、意味説明や別名・異名などの情報を示すが、本文提示のもっとも重要な目的は、見出しとなる漢字・漢語の形が典拠を持つことを示すことである。しかし、『倭名類聚抄』の項目の中には、見出し語と一致する形が本文中に現れない場合が少なくない。

『倭名類聚抄』において、見出し語と本文はどのように関係するのだろうか。もし本文より見出し語を選ぶのであれば、下の例(41)－(44)のように、本文に現れない形を敢えて見出し語とすることは理解しがたい。また、例文(16)の「脅肋」や(17)の「臣僕」のように二字の見出し語に対して各々出典を挙げている場合から見ても、やはり見出し語となり得るものを先に選び、それに関する本文を探したと考えるのがより妥当であると判断される。

- (41) 道祖 風俗通云、共工氏之子好遠遊，故其死後，祀以爲祖神〔漢語抄云，道祖，佐部乃加美〕。(1-38 ウ)
- (42) 烏賊墨 野王案，鰩魰魚，背有一大骨，腹中有墨〔背骨與甲同，墨以加乃久呂美〕。(8-54 オ)
- (43) 白貝 唐韻云，蛤〔古三反，一音含，辨色立成云，蛤於富，本朝式用白貝二字〕。
爾雅云，貝在水曰蛤也。(8-43 オ)
- (44) 舟事類 說文云，艘〔子紅反，俗云爲流〕，船着沙不行也。
唐韻云，艤〔魚綺反，訓不奈與曾比〕，整舟向岸也，舠〔初教反，訓加比路久〕，船不安也。(3-60 オ)

一方、『倭名類聚抄』の項目は、「見出し語－本文－和訓」を基本構成とするが、中には和訓が提示されない例が多数存在する。和訓の収集・整理は、『倭名類聚抄』の重要な編纂目的であろうが、「族昆弟」、「仍孫」のように「和訓

を「するそうにもするすことのできない語」(濱田 1967) までも項目として設定していることを考えると、少なくとも項目編成において、和訓は必須不可欠な要素とは言い難い。そうすると、『倭名類聚抄』の項目編纂において、その出発点となれるのは、見出し語に他ならないということになる。『倭名類聚抄』が何を材料として、どのように見出し語を選定したのかに関しては、より綿密な検討が必要となるが、『倭名類聚抄』が基本的に類書の構成を模倣していることを考えると、見出し語の選定においても、類書が重要な参考資料となった可能性は高いと判断される。そして、『倭名類聚抄』は漢語抄類に基づいて作られたとされるが、漢語抄類は、『倭名類聚抄』の和訓の材料となるだけでなく、項目選定においてもやはりその材料として使われたと考えられる²⁴⁾。恐らく、類書や漢語抄類などを材料として見出しとなり得るものを選び、それに関わる情報を様々な文献より集め、取捨選択したのだろう。『倭名類聚抄』がなるべく典拠ある「本文」を求め、権威付けようとしたことを考えれば、見出しに関しても、同じことを求めているのだろうと推測できる。場合によっては、本文

24) 漢語抄類を出典とする本文で漢語のみを単独で示す場合が多いことは、その点に関連付けて解釈できるかもしれない。他に「本草」の場合も、漢語のみを単独で提示する場合が3割(246例の中82例)程度に達するが、「本草」と示される部分は、河野(1983, 1988)で指摘したように、『本草和名』を基準として、孫引きのような形で『新修本草』より本文を探したと思われる。下の例文(1)～(6)で示す「山石類」の「陽起石－凝水石－慈石－玄石－理石－長石」の部分が、『本草和名』(1-6ウ～1-7ウ)・『新修本草』(巻4)の提示順序とほぼ一致することは、『倭名類聚抄』の項目選定の問題を考える上で、とても興味深い。漢文注においても、「一名」を冠する部分は『本草和名』・『新修本草』の記述と一致する。(2)の「凝水石」に対する「或云、縦理爲寒水、横理爲凝水」の部分と(3)の「慈石吸針」の部分は、『本草和名』では見当たらず、『新修本草』では確認できるが、『新修本草』では「慈石」を「磁石」と示している。

- (1) 陽起石 本草云、陽起石、一名羊起石。(1-69 オ)
- (2) 凝水石 本草云、凝水石、一名寒水石、此石末置水中、夏月能爲氷、或云、縦理爲寒水、横理爲凝水。(1-69 オ)
- (3) 慈石 本草云、慈石吸針[慈石此間云之蛇久、慈正、從石作磁、見唐韻]。(1-69 ウ)
- (4) 玄石 本草云、玄石、一名玄水石[今案慈石、又有玄石之名]。(1-70 オ)
- (5) 理石 本草云、理石、一名立制石[今案礬石、又有立制之名]。(1-70 ウ)
- (6) 長石 本草云、長石、一名方石。(1-70 ウ)

を探してから見出し語を見直し、見出し語を置き換えることもあったのだろう。例(19)－(22)のように十巻本と二十巻本の間で見出し語が交代される場合からも、そのような検討の過程を想定することができるのである。

参 考 文 献

- 池田源太(1969)「平安朝における「本文」を権威とする学問形態と有職故実」(『延喜天曆時代の研究』, 吉川弘文館)
- 池田証寿(1994)「類聚名義抄の出版研究の現段階」(『信州大学人文学部人文科学論集』28)
- 上田正(1984)『切韻逸文の研究』(汲古書院)
- 太田晶二郎(1984)「尊經閣三巻本色葉字類抄解説」(『尊經閣三巻本色葉字類抄』, 勉誠社)
- 大槻信(2002)「古辞書と和訓－新撰字鏡〈臨時雑要字〉－」(『訓点語と訓点資料』108)
- 大槻信(2004)「和名類聚抄の和訓－和訓のない項目－」(『国語国文』73-6)
- 川口久雄(1959)『平安朝日本漢文学史の研究』(明治書院)
- 河野敏宏(1983)「『和名類聚抄』と『輔仁本草』の関係について－『和名類聚抄』漢文本文に関して」(『岡大國文論稿』11)
- 河野敏宏(1988)「『和名類聚抄』の音注の文獻的性格－『本草和名』の音注との比較による」(『愛知学院大学論叢一般教育研究』35-3・4)
- 藏中進・林忠鵬・川口憲治(1999)『倭名類聚抄十巻本・二十巻本所引書名索引』(勉誠出版)
- 呉美英(2004)「和名類聚抄における本草和名－河野(1983)の再考－」(『日本学報』59)
- 貞荊伊徳(1983)「『新撰字鏡』〈臨時雑要字〉と『漢語抄』」(『国語と国文学』60-1)
- 高橋忠彦・高橋久子(2006)『日本の古辞書－序文・跋文を読む』(大修館書店)
- 築島裕(1963)「和名類聚抄の和訓について」(『訓点語と訓点資料』25)
- 築島裕(1965)「本草和名の和訓について」(『国語学研究』5)
- 築島裕(1973)「古辞書における意義分類の基準」(『品詞別日本文法講座10－品詞論の周辺』, 明治書院)
- 辻星児(1979)「倭名抄所引の「陸詞切韻」について」(『岡山大学法文学部学術紀要』40)
- 辻星児(1980)「倭名抄所引の「玉篇」について」(『岡山大学法文学部紀要』1)
- 中村雅之(1988)「『倭名類聚抄』所引の「陸詞切韻」－東宮切韻利用の問題をめぐって」(『汲古』13)
- 新野直哉(1986)「『和名類聚抄』の「俗云」の性格－「A 俗云 B」の場合について－」(『文芸研究』112)
- 西宮一民(1969)「和名抄所引日本紀私記について」(『皇学館大学紀要』7)
- 濱田敦(1967)「倭名類聚抄」(『本邦辞書史論叢』, 三省堂－『日本語の史的研究』, 臨川書店(1984)所収)

- 不破浩子（1983）『『和名類聚抄』撰述の方針について－順と極斎の立場の相違を問題として－』（『叙説』8）
- 不破浩子（1991）『『和名類聚抄』の体例に関する一試考－「箋注」本文を対象として－』（『訓点語と訓点資料』86）
- 宮沢俊雅（1992）「図書寮本類聚名義抄の注文の配列について」（『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院）
- 宮沢俊雅（1997）「倭名類聚抄諸本の出典について」（『北海道大学文学部紀要』45-2）
- 宮沢俊雅（1998）「和名類聚抄と漢語抄類」（『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院）
- 山口角鷹（1965）「和名抄と漢語抄」（『漢学研究』複刊3）
- 山口角鷹（1968 a）「倭名抄所引説文考」（『東京学芸大学紀要』19）
- 山口角鷹（1968 b）「倭名抄所引説文考（二）」（『東京学芸大学紀要』20-2）
- 山田健三（1992）「順〈和名〉粗描」（『日本語論究2 古典日本語と辞書』, 和泉書院）
- 山田健三（2002）「和名類聚抄の掲出項目」（『訓点語と訓点資料』108）
- 山田俊雄（1978）『日本語と辞書』（中央公論社）
- 林忠鵬（2002）『和名類聚抄の文献学的研究』（勉誠出版）

[附記] 本稿は、松山大学特別研究助成（平成19年度）による研究成果の一部である。